

ク
ー
リ
ン
グ
・
ラ
ブ

登場人物

ミナト

ナツミ

ウミカ

1

と、音楽が流れ、開幕。そこには、ミナトとナツミがいる。

ミナトはナツミに手を差し出して、

ミナト 好きです

ナツミ ……はい。

ミナト ……はい。

ナツミ 好き。

ミナト はい。

ナツミ はい。

ミナト はい。

ナツミ はい。

ミナト それで……。

ナツミ はい？

ミナト お返事は。

ナツミ お返事。

ミナト はい。

ナツミ ……なんの、お返事。

ミナト え？

ナツミ お返事も何も、私は今、「ミナトくんが私のことを好きだ」って事実を聞いただけで……。例えばね、私に「めっちゃお饅頭好きなんだよね」とか言われても、私は、「ああ、そうですか。」としか思わないっていうか……。

ミナト え、あ、

ナツミ あ、いや、私が好きな食べ物とか聞いたんだったら、そこから会話広げられたのかもしれないんだけど、そうじゃなかったし。それとか、私もすごくお饅頭が好きだったら「分かる」とか「どこそこのお饅頭が美味しいよね」とか広げようがあったかもしれないけど、私そんなにお饅頭好きじゃないし……。好きなもの教えられて返事って、すごく難しいっていうか。

ミナト ——あの、あの、

ナツミ はい、

ミナト ナツミさんは、お饅頭じゃないです。

ナツミ 知ってるよ。だからこれは、ただのたとえ話で、

ミナト あ、うん、そっか、そうだよね、だから、その！

ナツミ はい。

ミナト お付き合いをしてください！

ナツミ ……お付き合いってなんですか。

ミナト ええ……。

ナツミ お付き合いって何すること？

ミナト それは……。手紙を交換したり、一緒に勉強をしたり、週末は二人で会ったり、
 ナツミ それじゃ、私はモモコとも付き合ってるの。

ミナト え？

ナツミ ハルナとか、シホとか、

ミナト あー、いや、それとも違って、

ナツミ じゃあ、何。どうしたらいいの。

ミナト ……恋。

ナツミ はい？

ミナト 恋してます。

ナツミ 恋。

ミナト これは、恋です。

ナツミ はい！

ミナト この燃えるように熱くて、掴みきれないこの気持ちは、恋です！！

夏である。

2

場面が変わって、そこはミナトの家。

ナツミは、その家の縁側でミナトの姉——ウミカと二人でいる。

ナツミ 恋、って何。
ウミカ んん？
ナツミ 恋。
ウミカ あー、はいはいはい。
ナツミ え？
ウミカ 来たね。
ナツミ 何が。
ウミカ 告られた？
ナツミ え？
ウミカ 言ってみ？告られた？
ナツミ あー……。
ウミカ えー、誰？誰？
ナツミ 冷やかさないでください。
ウミカ だってえ。
ナツミ 分からないんだよな。
ウミカ 何が。
ナツミ 恋、心。
ウミカ え？？人を好きになったことないの。
ナツミ 多分。
ウミカ えー。
ナツミ ウミカちゃんはあるの？
ウミカ 私のことはいいんだけど、

ナツミ ええ？

ウミカ ない？心がざわつく感じ。

ナツミ ざわつく。

ウミカ 体が熱く火照って、ふわっと捉えようのない温かい空気に包まれる感じ。

ナツミ 温かい、空気。

ウミカ そう。

ナツミ マラソン走って、

ウミカ ちよつと違う。

ナツミ えー、ウミカちゃんはあるの？

ウミカ 私のことはいいいんだけど。ほら、好きな男の子が別の女と話してたら、ヤカンの湯気みたいにキーツとなる感じ。

ナツミ ヤカン？

ウミカ そう。

ナツミ 変なの。

ウミカ 変なのよ。

ナツミ 変なんだ。

ウミカ そう……。それで？

ナツミ え？

ウミカ どうしたの。まさか、断った？

ナツミ いや……。

ウミカ えー！

ナツミ 押し負けちゃって。

ウミカ マジで！で、で、相手は。

ナツミ ……ミナトくん。

と、ミナトが紙とペンを手にとりてくる。

ミナト お待たせ、ごめんごめん。
ナツミ ううん。

ウミカ ミナト？

ミナト はい。

ウミカ ナツミちゃん？

ナツミ 言っちゃった。

ミナト 話したの？

ナツミ うん。

ミナト なんで！

ナツミ いいじゃん。

ミナト いや、よくないよ。

ウミカ よくないのはこっちだよ、ミナトと？ナツミちゃん？(ナツミに) ちょっと考えよう。

ミナト 姉ちゃんには関係ない

ウミカ 関係なくない！

ミナト なんで！

ナツミ いいじゃん、二人とも。

ウミカ だって！

ナツミ ミナトくん、できた？

ミナト うん。

ナツミ 見せて。

ミナト ここで？

ナツミ いいから。

ミナト うん。

ウミカ 何それ。

ミナト 姉ちゃんには関係ない。

ウミカ なんて！

ナツミ 恋人契約書。

ウミカ は？

ナツミ うん。

ウミカ 契約書？なんで？

ナツミ 契約っていうか、約束。

ウミカ どういうこと？

ミナト 姉ちゃんには関係ない。

ウミカ ワケわかんないんだけど、

ナツミ どうしても付き合ってくれって言うから、じゃあ付き合っって何？ってことになって、

ウミカ それで、「契約書」？

ミナト 姉ちゃん！

ナツミ 恋とか愛とか、正直よくわかんないし、でも、こうやって文書にしておけば大丈夫かなって。

ミナト っていうことになりました。じゃあ、ここ。署名。

ナツミ はい。

ウミカ ええ。

ナツミ (署名して) キムラ、ナツミ……。

ウミカ 大丈夫？

ミナト はい。では、よろしくお願ひします。

ナツミ よろしくお願ひします。

3

ミナト・ナツミ 第一条！

ミナト 二人の関係を恋人と名付ける。

ナツミ 二人はただ唯一の関係とし、重複を認めない。

ある日。ミナトとナツミは神社のかげで落ち合い、こっそりと会つ。

ミナト ナツミちゃん！

ナツミ ミナトくん。

ミナト 待たせてごめん。

ナツミ いいえ。

ミナト じゃーん。(と、摘んできた花を見せる)

ナツミ わ。

ミナト 可愛い花が川辺に咲いてたから、ナツミちゃんに見せようと思って。

ナツミ ちぎってきたの？

ミナト うん。

ナツミ かわいいそう。
ミナト あ、えっと、ごめん、そうだよね。
ナツミ でも可愛いね。
ミナト え？
ナツミ 可愛い。

二人は微笑む。

ミナト・ナツミ 第二条！

ミナト 二人は、なんでもない日常に、なんでもない会話を重ねること。

またある日。ナツミとミナトはどこかの草っ原で空を見上げている。

ナツミ 空が高いね。
ミナト そうだね。
ナツミ すごい入道雲。
ミナト あの雲、東京からでも見えるのかな。
ナツミ うーん、流石に見えないんじゃない。
ミナト そっかー。
ナツミ あの雲、食べられるかな、電気飴みたいに。
ミナト 雲は食べられないよ。

ナツミ そうなの。

ミナト 雲は、たくさんの水と、氷と水蒸気の集まりなんだ。

ナツミ 水が浮いてるの？

ミナト そう。海の水が温められると水蒸気になって、空高く舞い上がる。空に飛んでいった水は今度は冷やされて、冷やされた水は気体から液体に変わり、そのまま空を漂うんだ。

ナツミ へえ……。

ミナト 信じられないよね。

ナツミ 温められてフワフワ漂って。

ミナト そう。

ナツミ 冷えると、液体になるのか。

ミナト そう。

ナツミ ミナトくんの恋もいつか液体になるのかな。

ミナト ええ……。ナツミちゃんには、フワフワ浮かぶ水蒸気はある？

ナツミ ふふふ。

ミナト あのね。

ナツミ うん。

ミナト 来年から、東京の学校に進むことになった。

ナツミ え。

ミナト 大丈夫？

ナツミ 何が？

ミナト 契約。続けてて。

ナツミ もちろん。

ナツミは笑う。

4

ナツミ 第三条。二人は遠く離れていても、文通をすること。

しばらく日が経ったある日。ナツミはミナトから届いた手紙を読んでいる。

ミナト キムラナツミさま。いかがお過ごしでしょうか。東京は人や物の流れがとても早くて、僕は置いていかれそうです。映画館では、日本の快進撃が大々的に映し出されますが、その一方、百貨店からはものがどんどん無くなり、今、この国がどうなっているのか、新聞は本当のことを伝えているのか、よく分からなくなります。

そんな中で、あなたからの手紙は、僕にとってただ一つ確かなもので、心の支えです。ありがとうございます。ナツミちゃん。それから、姉のウミカにもよろしくお願ひいたします。僕が心配していたなどと言つと怒られそうですが、彼女も年頃の女です。父母のいない僕にとって、大事な家族です。それでは、また。

と、そこは、ミナトの家である。秋ごろ。虫の鳴き声が聞こえている。

ナツミは、ミナトがいなくなったその家で、縁側に座っている。

ウミカがやってくる。

ウミカ ナツミちゃん、お待たせ。

ナツミ いいえ、寒くなってきましたね。

ウミカ ね。どう、ナツミちゃん、工場、大変でしょ。

ナツミ まあ。でもみんな大変な時代だから。

ウミカ そうね……。あ、ミナトとは？どう？まだ続いている？

ナツミ うん。

ウミカ そっかそっか。今だに飲み込めないときある。

ナツミ 恋人ですから。

ウミカ 契約、恋人でしょ。

ナツミ まあ。

ウミカ ねえ、正直、好きなの？恋心、分かってきた？

ナツミ うーん。

ウミカ そうよねー。相手がミナトじゃね。

ナツミ 居心地はいいですよ。あ、そっか、この前も手紙くれて、

ウミカ あ、文通してるんだ。

ナツミ そういふ契約なんで。

ウミカ そうなんだ。あいつこっちに碌に手紙もよこさないくせに。なんか言ってた？

ナツミ 元氣そうですよ。向こうは色々あるみたいですけど。

ウミカ そっかー。

ナツミ 読みますか、手紙。

ウミカ いいの？
ナツミ うん。

ウミカは、ナツミが差し出した手紙を読んで、

ウミカ 誰が年頃の女だ。

ナツミ 心配しましたよ。

ウミカ 自分はナツミちゃんがいるからって、調子乗ってない？

ナツミ あはは、いい話ないの？

ウミカ 私のことはいいいんだけど。ちょっとミナトに似てきたんじゃないの。

ナツミ そんなことないですよ。

ウミカ あ、なんか、なんかなー。

と、二人の目の前を赤い紙飛行機が通り過ぎ、足元にコツンと落ちる。

ウミカはそれを認め、拾い上げる。それは、手紙である。

ナツミ ウミカちゃん？

ウミカ あ、ごめんごめん。

ナツミ うん。

ウミカ ……今度、一回帰ってくるってよ。

ナツミ ミナトくん？
ウミカ うん。
ナツミ そうなんだ。
ウミカ うん。……会ってあげて。
ナツミ ……。

5

ある日。そこはいつかの神社の陰。ナツミとミナトが待ち合わせをしている。

ミナト ナツミちゃん。
ナツミ ミナトくん。
ミナト 待たせてごめん。
ナツミ いいえ。
ミナト 久しぶり。元気だった？
ナツミ うん。あのね、じゃーん。(と、摘んできた花を見せる)
ミナト あ。
ナツミ お花。懐かしいでしょ。
ミナト ……うん。ありがとう。
ナツミ いいえ。
ミナト ……ナツミちゃん。

ナツミ 何？

ミナト 今日はお別れを言いにきました。

ナツミ え？

ミナト 今まで、ありがとう。

ナツミ どうしたの。

ミナト なかったことにしよう。

ナツミ なかったこと。

ミナト 契約。

ナツミ なんて、

ミナト ナツミちゃんには、無理して付き合ってもらって、

ナツミ うん、

ミナト ただ昔からの知り合いってだけで、僕が好きになっちゃって、訳もわからず恋人になって、

ナツミ ねえ、

ミナト よく分からないのに、分からないまま巻き込まれちゃって、最悪だよね。

ナツミ ねえって。

ミナト ……。

ナツミ 何があったの。

ミナト 何も。

ナツミ わけわかんない。

ミナト 最初から分からないじゃん。分からないんだよ。

ナツミ でも、分かるうとしてたし、分からなくてもいいように約束を決めてさ。

ミナト たった紙きれ一枚で約束させられて……？どうせ約束なんて破られるんだ。

ナツミ 破らないのが、約束でしょ。

ミナト 国同士でさえ、約束は破られるから、こんなことになってるんじゃない！

ナツミ ……？

ミナト もし、もっと早くに、これは戦争に向かうぞ、大変なことになるぞって、ちゃんと分かっていたら、こんなことにならなかったの？

ナツミ ……。

ミナト 僕だって分からない。あまりに大きすぎて、あまりに突然すぎて、分からない。

ナツミ 何があったの？

ミナト ナツミちゃん、僕は、……出撃することになりました。

暗転。

6

暗闇の中で、ラジオが聞こえてくるが、しかし、何を伝えているのかはつまりと分からない。そのよく分からない声は、この世界が変化することを、はっきり伝えている。

明転すると、そこは、夏。

家の縁側である。そこには、ウミカが座って、手紙を握りしめていた。

ナツミがやってくる。

ウミカ 終わったねー。

ナツミ 終わったね。

ウミカ なんだったんだらうね。

ナツミ 何が。

ウミカ この戦争。

ナツミ ……分からない。

ウミカ 分からない、分からない。何も分からない。

ナツミ うん。

ウミカ 正義も、悪も、これまでも、これからも、確かなことは何一つ。

ナツミ うん。

ウミカ あればいいのか、契約書。

ナツミ 契約書？

ウミカ これは、こういうことです。お約束です、って。

ナツミ 意味ないですよ。そんなの。

ウミカ ……。そうだったね。

ナツミ ……。

ウミカ はい。

と、ウミカはナツミに手紙を差し出す。

ナツミ 何、これ。

ウミカ お手紙。

ナツミ ……。

ウミカ ナツミちゃんに。ミナトから。

ナツミ うん……。 (受け取って) 湿ってる。

ウミカ ああ、ごめんごめん。

ナツミ ううん。

ウミカ なんてなんだろうねー。

7

ミナトは飛行機に乗っている。眼下に広がる海を見て、これまでの記憶を辿っていた。

ミナト 父さん、母さん、僕は今、どの辺りを飛んでいるのでしょうか。天国はきっと、ここから近いところなのでしょう。この飛行機は、言うなれば、僕の人生そのものかもしれない。無限の可能性を抱いて熱を帯び生まれてくる赤ん坊は、次第に世界を知り、その熱を冷ましていきます。その流動的な肉体は世界の流れに逆らえず、そうして最後には、体温は消え固まってしまいます。肉体は動くことなく、血の流れは止まり、氷のようになります。この飛行機の後ろには飛行機雲が伸びて、水蒸気と水滴と氷が集まって、無数の人生を現しているとすれば、この僕の飛行機が飛んだ後には、多くの人生が広がると言えるでしょう。父さん、母さん、あなたが繋いだこの命は、きっと明日の多くの人生を切り開きます。だから、あなたたちの元に行くことをお許しください。姉ちゃんは強い人です。きっと一人でも生きていけます。僕はそう

信じています。

思い残すことと言えば……。ナツミちゃん。ナツミちゃん、ナツミちゃん、僕は、僕は……

出撃することになりました。

そして、どっか、二人は出会った。

ナツミ ……はい。

ミナト ……はい。

ナツミ 出撃。

ミナト はい。

ナツミ それで？

ミナト ……はい。

ナツミ それで、

ミナト ……それだけ。返事を聞くこともないし、何かをお願いすることもない。ただ、一言だけ言っておきたくて。

ナツミ はい。

ミナト 契約満了です。ありがとうございます。

ナツミ 私は、好きなんて分からないままです。こころのざわつきもないし、体が火照ることもない。でも、あなたと過ごした日々は、そう、お風呂のお湯のように居心地がよくて、こころのこの辺に溜まっている。それが煮えたぎるようなことはないけれど、ずっと浸かっていたい。

ミナト はい。

ナツミ ちょうど、水蒸気が鍋の蓋に水滴になって、少しずつ溜まっていくように、私の心を満たし出した。

ミナト 気体が、液体に。

ナツミ そう。空気が冷やされていくように。でも、その液体がなんだか分からないの。全然分からなくて。気が付いたら泳いで、いつか溺れちゃうんじゃないかって時々不安になってしまう。だから私はその水に「愛」と名前をつけました。

ミナト はい。

ナツミ 本当に行ってしまうんですか。

ミナト はい。

ナツミ どうしようもないの？

ミナト なぜか、世界には、抗えない力があるようです。

ナツミ もっと早くに気づいていれば、名前をつけてあげたらと、今ほど後悔したことはない。

ミナト ……はい。

問。

ミナト もしかしたら、ずっと気づかない方が幸せだったのかもしれない。難しい言葉を知らなくても、雲は空を漂い、花は川辺に咲く。僕もあなたに告白するあのときまで、恋という名前がありませんでした。父も母も、祖父も祖母も、ずっと前のご先祖様だって、その決まりの中で生きていて、僕が今ここにいる。ナツミちゃん、あなたも。

ナツミ はい。

ミナト だから、悲しまないてください。あなたは気づいてくれた。それだけです。

ナツミ 私は、これからどうしたらいいの。

ミナト 分からない。僕もこれからどうなっていくのか、分からないから。でもね、ナツミちゃん。流れていく世界の法則を目を開いて見ていくこと。名前をつけていくこと。そして、時々、僕のことを思い出してくれたら、それで満足。

ナツミ ミナトくん。

ミナト さようなら。

飛行機が、遠くで何かに近づいたらへ。

ナツミは何もできず、そこに立って、彼の行方を見守っている。

。りむお。